



107号

公開日 令和8年1月27日

最終更新 令和8年2月3日

(公社)埼玉県医療社会事業協会

会長 門岡高太郎

埼玉県さいたま市大宮区桜木町1-378

BIZcomfort 大宮西口ビル7階47号室

<http://saitama-msw.sakura.ne.jp>

巻頭言 会長・門岡高太郎

会員の皆様におかれましては、健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。また、日頃より当協会の活動に対し多大なるご支援とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本誌発行にあたり、二つ残念なお知らせをお伝えしなければなりません。長年にわたり当協会の理事としてご尽力いただいた大塚智秋氏が2025年9月3日に、海津加代子氏が2025年12月11日にご逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げるとともに、その多大なるご功績に深く感謝いたします。

さて、昨今の医療業界を振り返れば、診療報酬改定による医療機能の分化が進み、病院完結型から地域完結型への移行が加速しています。一方で、長引く物価高騰や不安定な政治情勢は、経済的に困窮する世帯や孤立を深める人々を増やし、医療福祉相談室に持ち込まれる課題はますます複雑化・多様化しています。社会の分断や格差が顕在化する今だからこそ、我々医療ソーシャルワーカーの専門性と倫理観がこれまで以上に問われていると思います。私たちが守るべきは「生活者の視点」です。高度化する医療技術や効率化が叫ばれるシステムの中でも、目の前の患者さん・家族を一人一人異なる背景や価値観、人生を背負った「生活者」としてとらえ、寄り添い、関係機関をつなぎ、「その人らしい暮らし」を諦めないことこそ果たすべき役割ではないでしょうか。

また、近年の能登半島地震をはじめとする大規模災害の頻発は、私たちに「日常の備え」と「災害時のソーシャルワーク」の重要性を改めて突き付けています。いつ何時何処で発生するか分からないため災害は決して対岸の火事ではありません。災害拠点病院だけでなく、地域全体でネットワークを構築し、有事に備える必要があります。当協会でも災害担当者を配置し関係機関と準備を進めています。

本年も当協会は研修や交流を通じて会員の皆様の研鑽を支え、職能団体として、公益社団法人として地域福祉向上に貢献したいと思います。

昨年6月の定時総会において会長に就任し半年が経過しました。杉山前会長が30年にわたり務めてこられた役割を遂行することに私では力不足なのではないかと感じますが、周囲の仲間に支えてもらいながら私なりに務めを果たそうと思っています。私は中学生の頃からプロレス観戦が好きで故アントニオ猪木氏が引退スピーチで述べた「道」という詩をモットーにしています。経験したことがないことにチャレンジする精神、一歩踏み出す勇気の大切さが込められています。

最後にその詩を紹介して結びとさせていただきます。

この道を行けばどうなるものか

危ぶむなけれ

危ぶめば道はなし

踏み出せばその一足が道となり

その一足が道となる

迷わず行けよ行けば分かるさ

大塚さんのこと 前会長・杉山明伸（立教大学）

大塚智秋さんが、2025年9月3日、逝去されました。享年62歳、6月の定時総会までは本協会の副会長を務められ、8月に入院される直前まで自治での勤務を続けていました。知性と愛情の体現者を逸することは、クライエントにとって、そしてソーシャルワーカー仲間にとっても、大きな損失です。

2023年7月、大塚さんは体調異変を自覚して受診し、諸検査の結果、大腸癌・肝転移を告知されました。自分のことで他者を煩わせたくない、周囲に病気を知らせることは控えられ、協会内では、自治の同僚のほか、副会長の竹内さんと私にだけ事実が伝えられました。伏せられていたとはいえ、病状の進行とともに容貌の変化がありましたので、察して敢えて何も言わなかった人もいらした一方、この2年間、直接、対面することのなかった人々は、訃報に接し、とても驚かれたことと推察します。

大塚さんは栃木県で生まれ育ち、県立宇都宮女子高から宇都宮大学教育学部に進まれ、1986年、自治医科大学の学事課に就職されました。医師の研究・実験に携わり、ネズミを手なずけるコツを知っているとか、ネズミの採血も上手にこなしていたと和やかに語っていました。当時の自治医科大学附属病院のソーシャルワーク部門には、日本協会の監事を務めたこともある石井朝子さんが勤務されており、大塚さんは石井さんに触発され、仕事の傍ら、仏教学社会福祉学部で学ぶようになりました。オンラインのない時代の通信教育ゆえ、スクーリング等のため、相当回数、京都まで出向いたようです。そして、社会福祉士取得後の1993年、附属病院の医療福祉相談室に異動されました。石井さんを生涯の師として心から尊敬され、クライエントとの丁寧な面接、的確なアセスメントなどを厳しく鍛えられました。

1989年に開院した自治医科大学附属大宮医療センターのソーシャルワーク部門は、石井さんの兼務を経て、1994年4月、大塚さんが着任されました。当時の医療センターは稼働病床300床程度で現在の半分ほどの規模とはいえ、ソーシャルワーカーとしては1年ほどのキャリアにもかかわらず1人で任せられたのは、既に一定レベル以上の実力に達していたということでしょう。その頃は、他の事務員と同じ部屋に事務机があり、面接は共用の応接室という環境で業務されていたように記憶しています。

自治医科大学は私立の学校法人でありながら、旧自治省（現総務省）が主導して全都道府県と共同で設立し、現在も法人理事長を元総務事務次官が務めるなど、官僚組織として的一面を有します。そして、大学病院として、臨床に加え研究・教育も重視されるという、一般の病院にはない特徴も備えていました。このような中でソーシャルワーカーとしての存在感を示すには、誰もが認める圧倒的な実績に加え、独特的組織風土を賢明に対処する能力も求められました。大塚さんは着実に院内での足場を固めていき、医療センター1階の正面玄関近くにソーシャルワーカー単独の事務室と3つの相談室を確保し、大塚さんを含め7名の常勤ソーシャルワーカーと1名の事務を擁する医療福祉相談室にまで発展させました。本病治療中で感染に注意しなければならないのに、ある診療科の教授から学会でのシンポジストを請われて地方都市まで出向いたことや、葬儀の際に元事務部長をはじめ医師・看護・リハ・事務等様々な職種が参列し、顧問弁護士からも供花されていたことなどは、幅広い信頼の厚さを示すものと思います。

大塚さんのソーシャルワークは院内に留まらず、行政・他機関等との交流や地域活動にも積極的に取り組まれていました。協会活動にも一貫して協力的で、財務の幹事、研修部の理事、研修部長を経て、2016年から副会長を務めていました。協会の定時総会では、具体的な事業計画に先立ち基本方針を提示していますが、近年は大塚さんが主筆でした。

抗癌剤による治療は、当初、相応の副作用があったものの、比較的、順調でした。しかし、1年経過した当たりから、手足の痺れ、寒冷刺激への過敏な反応、全身的な発疹、食思不振などに悩まされるようになり、更なる転移も見つかりました。元よりショートスリーパーで睡眠時間は短いと言われていましたが、これらの症状により一層眠られなくなったようです。このような時期でも精神的には安定を保ち、仕事への気力が萎えることはあ

りませんでした。もっとも、これは自治の同僚の方々の配慮と支援があればこそ可能で、この間の同僚の緊張感・心的負担を想像すると胸に迫るものがあります。

本病を告知されて以降、医師らとの話し合いを踏まえ、大塚さんは残された時間が2年余りと受けとめていました。勿論、少しでも長引かせたい思いもあり、せめて今年度末まで勤務して、そこで区切りをつけたいと考えていたようです。その後、医心館のような施設で療養することも想定していました。これを実現するべく、辛い症状を緩和させる目的で8月に入院治療を選びました。2週間で退院すると言わっていましたが、結果的にこの世でのお別れになってしまいました。

葬儀は郷里の宇都宮で営まれました。親族や自治・地元の方々に加え、短期間の連絡にもかかわらず、協会関係でも、既に退会されている人も含め、会場に入られないほどの実に多くのソーシャルワーカーが駆けつけ、または供花や弔電を贈りました。誰からも慕われる人柄を表していました。

大塚さん、私があなたと初めて会ったのは附属病院の相談室で勤務されるようになった頃でした。いずれ大宮の医療センターに異動されるとして、石井さんに紹介してもらいました。その後、研修・集会などで一緒になる機会があったのですが、討論や何気ないやりとりで驚かされたことが何回もありました。あなたの豊かな表現、深い洞察、広い視野、安定した情緒、清濁併せのむ度量、ユーモア、「聰明」というのはこういう人のことを言うのだ、とても敵わない、でもとても頼りになる人だと思い知らされました。以来、判断に困った時はあなたに相談するようになりました。また、読書家で中・高の国語の教員免許を持っていることも知り、図々しく、巻頭言などの添削をお願いしました。更に、論文のチェックも依頼したこと也有ったのですが、日本語だけでなく、事実関係の訂正や内容の評価にまで及ぶ、言わば「査読」でした。私の社会人としての業績は間違いなくあなたのお陰です。

あなたは秩序を重んじる人で、これは時に保守的な発想に通じることがありました。ラディカルな物言いを好み私とは意見が一致しないことも少なからずありました。また、理屈が通れば納得される人でしたので、不本意であろう状況でも抗することなく、歯がゆく思うこともありました。特に本病発覚後、医師の説明に基づき余命を決めていたことや、抗癌剤の効果が薄れるようになっても主治医との関係性を第一に考えていたことなどは、私としては受け入れがたく、「患者はジタバタして当たり前だ」と悪態をつき、思いつく限りの次善策を提案しましたが、却って、たしなめられる結果になりました。病状が悪化して、苦痛が増していくても、現実を受け入れ、理性的な潔さを保ち続けていました。

あなたは入院される直前まで、一人のソーシャルワーカーとして業務に従事しており、感受性豊かで、クライエントに対する真摯な姿勢は変わることはありませんでした。2025年1月、大学での私の担当科目にゲストで登壇された際、過去の、患者の思いを受け止めきれずにサービスを展開してしまった事例を紹介されました。あなたほどのベテランが敢えて失敗事例を学生に伝えることで、ソーシャルワーカーとしての矜持を示してくれました。あなたが好んで使う言葉の一つに「省察（リフレクション）」がありました。できない自分と向き合うことは辛いはずですが、あなたは躊躇なく対峙していました。

定時総会での基本方針は、折々の社会情勢と制度の変化を踏まえ、患者・家族と医療機関に及ぶ影響と、ソーシャルワークの価値と倫理に基づき私たちが果たすべき責務を簡潔明瞭に綴っていました。本当に大切なことはあなたが教えてくれました。あなたの実践と言動は、今も、真実で掛け替えのないことばかりです。だから、残された者としては、それらを真剣に受けとめ、自分の役割を誠実に果たしていかなければと思います。

病気を告げられた時、比較的、対面する機会が多い方だったのに、異変に気づけなかった自分を情けなく思いました。普段から体調不良になるにしても週末に限るというあなたでしたので、病気をもコントロール下にあると漠然と思っていた。なので、遠からず、この世での別れの日が来ることを覚悟していたはずですが、いまだ現実感を持ち得ないでいます。葬儀のため石井さんや協会の先輩たちに連絡した際、口を揃えたように「頑張

り屋だった」と言われました。このように、近くにいた者はあなたが持てる力の全てを使って生きてきたことを知っています。それほど懸命に生きていたのですから、標準的な命よりも短くなることはやむを得ないと、私は思うことにします。

大塚さん、お疲れさまでした。

あなたと出会えて、私は本当に幸せでした。

どうもありがとうございます。

継続は力なり 南部ブロック責任者・殿岡芳直

明けましておめでとうございます。皆さん、体調崩さず、新年を迎えたでしょうか？

毎年、年末年始は高校サッカーが気になり、よく観ています。私は小学2年からサッカーを始めて、中学・高校・大学迄、サッカー部に所属しておりました。そのせいもあり、直接観戦に行ったり、テレビ観戦をして、感動を貰っております。サッカーは、現在殆どやっておりませんが、それに関連するフットサル（5人制のミニサッカー）をまだ、継続してやっています。趣味が高じて、色々なチームでボールを蹴らせて貰ったり、その仲間がどんどん増えています。男女問わず、楽しめるスポーツなので、交流するにもとてもいいスポーツだと思います。今回、この趣味を継続していたことによって、仲間や繋がりが広がったと改めて感じています。

私は、H13.4に病院の医事課に配属後、H14.8に病院のMSW業務と連携室の立ち上げ対応、その後、MSW専属勤務後、H21.6に異動で老人保健施設のSW（支援相談員）として働き、H24.4に異動で地域包括支援センターのSW（社会福祉士）となり、現在も継続している状況です。病院・施設・在宅と場所を変えながらも何とかソーシャルワーカーとして、今年で24年目を迎えることができました。異動する度に、不安やモチベーションが下がることもありましたが、その際、自分の気持ちを奮い立たす言葉があります。その言葉は、県協会の先輩からの「ソーシャルワークは何処に行っても出来る！」と言われた一言です。

異動で場所や勝手が変わっても自分の中でソーシャルワーカーとして（専門職として）どう取り組めるかを毎回考えるきっかけをくれています。ソーシャルワーカーとして継続して働くこと、また、県協会の仲間と継続して繋がることが自分のネットワークの拡大や成長に繋がると感じています。その例が、以前の職場のエリア（東部ブロック）から、現在の職場のエリア（南部ブロック）へ移動になった際に、仲間の繋がりに救われたことが多々ありました。また、前年度より、南部ブロックの責任者になった際も右も左も分からぬ自分で多くの仲間が助けてくれました。仲間と継続して繋がることは、まさしく『継続は力なり』だと感じています。

皆さんも県協会の仲間と継続して繋がることで、今後、自分を助けてくれる大きな社会資源になると思います。

今年も皆さんと一緒に楽しく活動と連携ができればと思っています。

今年も宜しくお願ひいたします。

研修部長のひとり言

研修部長・松本浩一

昨年6月の総会後より新体制で活動を開始した研修部の最初の活動は「新人研修会」でした。これまで新人研修会を取り仕切ってくれていた幹事の大園さんが中心となり、新任の理事・幹事も積極的に取り組んでくれ、3回シリーズの新人研修会も無事に終えることができました。3回の研修を新人さん達と一緒に受講し、事例検討のファシリテーターも行いながら、改めて私たち自身もソーシャルワーカーの仕事の価値や専門性を学び深めることができ、とても有意義な時間を過ごすことができ、新体制の絆を深めた要因になったのです。

2回目からは希望者を募って懇親会も開催して、参加された新人の皆さん達とたくさん交流する事ができ、所属する病院・施設を超えた素敵な出会いが協会の持つ強みでもあると再認識しました。研修で知り合えた繋がりが、仕事で行き詰った時や困った時に助け合える関係に発展していくように研修部としても支援できればと考えています。

余談ですが、3回目の新人研修会後の懇親会では事務局としての解放感もあり、ずいぶん気持ちよくほろ酔い気分になってしまいました。二次会のカラオケで塚田さんや下山さんが熱唱（踊り付）している事も気づかないぐらい寝入ってしまい、お開きの後気がつくとJR大井町駅に佇んでいました（最寄り駅は東浦和駅）。時すでに遅く終電が上野駅止まり…。妻に電話したらアホ！と一蹴され、24時間営業のお店に入ろうかと思ったのですが、ぐっすり眠っていたおかげでかなり頭が冴えてしまい、歩いて帰れるかもと思い、Googleマップ頼みで東浦和駅までの最短ルート(20km、5時間半)を見つけて、夜の長い散歩を楽しみました～。最難関は極寒の鹿浜橋…。全方位から強風が吹き荒れ、寒さで完全に酔いが覚めて、『何で歩いているのだろう』と自暴自棄のアセスメントを繰り返しながら、目的地の東浦和駅までたどり着きました…。たぶん上野駅から東浦和駅まで歩いて帰ったのは世界で自分1人だけだと家族に武勇伝のように話しても誰も相手してくれなかつたので、皆さんにもご報告でした…。この教訓は「酒を飲んでも呑まれるな」という昭和に流行ったフレーズを令和の時代に蘇らせただけの「不適切にも程がある」事例として皆さんも気をつけてください。

さて、国内情勢についても触れておきたいと思います。年末に国の2026年度予算案が閣議決定されました。防衛費が過去最大の9兆4000億円となり、初めて9兆円を超えました。ロシアによるウクライナ侵攻や台湾有事等の危機が前面に出て防衛体制の構築費が計上されたのです。この財源として2027年1月から防衛力強化のための所得税増税が実施される事を皆さんは知っていますか？所得税に1%を上乗せする「防衛特別所得税（仮称）」が新設されるのです。一方で現にある「復興特別所得税」を1%引き下げるでの負担は変わらないように見えますが、震災復興を目的とした税が実質的に軍拡財源へと転用される事には強い違和感があります。

医療介護の現場から見ればこの動きは看過できませんよね。物価高騰や診療報酬の抑制が重なる中で、多くの医療介護施設が経営危機に直面し地域医療の崩壊がすでに始まっているのです。東京商工リサーチの調査で病院や診療所を運営する事業者の倒産が2025年に41件となり、3年連続で前年を上回っています。倒産の他にも休廃業・解散が436件に上っているのです。

いま問われているのは、税金の使い道の優先順位だと思うのです。社会全体の健康にとってどんな未来を描くのか。医療・介護・福祉・教育といった私たちの命と生活を支える基盤への投資を削っていいのでしょうか。頃合いよく、衆議院選挙が2/8に行われます。私達自身、一人の生活者として、そしてソーシャルワーカーとして自分事として考える必要があるのです。

最後に、昨年急逝された当協会の副会長であった大塚さん、研修部長等の要職を務められた海津さんお二人のご冥福をお祈り申し上げます。お二人が築いてくださった研修部の事業をしっかりと引き継いでいく事がお二人への恩返しになると研修部一同心に留めてこれから活動に取り組んでいきたいと思います。

○ 研修部の体制

令和7年6月14日の通常総会にて研修部の体制が大きく変わりましたので、改めて皆様にお知らせ致します。

●理事

松本浩一（熊谷生協病院） 再

塚田祐子（自治医科大学附属さいたま医療センター） 新

下山友美（埼玉医科大学病院） 新

●幹事

大園あゆみ（済生会川口総合病院） 再

木嶋優子（新座志木中央総合病院） 新

飯塚かおり（プラーナクリニック） 新

6名中4名が新任としてフレッシュな顔ぶれとなりました。とは言え、皆さん経験豊富な方々なので、新体制発足以降の約半年の活動で気心の知れた関係に発展して（懇親会が多い）、お互いに助け合いながら取り組んでいます。写真は12月に行われた新人研修会の集合写真です。



令和7年12月13日 武藏浦和コミュニティセンターにて
新人研修会 受講生と一緒に集合写真『研修お疲れ様でした～』

○ 2/28 中堅研修会の開催

すでに案内通知が届いていると思いますが、下記の日程で中堅研修会を開催致します。

日時：令和8年2月28日（土）14:00～17:00

開催形式：集合研修 ※ハイブリッド開催、オンデマンド配信はなし

会場：立教大学新座キャンパス 9号館3階 931・932号室

テーマ：『省察＝リフレクション～日々の実践、新人・学生指導を反省的に振り返る～』

講師：杉山 明伸氏（立教大学コミュニティ福祉学部 教授）

内容：講義、グループワーク

対象者：実務経験4年目以上のソーシャルワーカー

参加費用：埼玉県医療社会事業協会 会員 無料

非会員 1000円（当日現金にてお支払い下さい）

申し込み方法：右記QRコードより申し込み

締め切り 令和8年2月13日（金）



～中堅研修会への期待～

今、私たちを取り巻く環境は目まぐるしく変化しています。社会保障制度の度重なる改悪、医療介護現場の経営難、多様な価値観と共に分断を叫ぶ人々…。現場でクライエントの命と人権を守る私たちソーシャルワーカーにもその波は押し寄せて、日々仕事に忙殺される毎日を送っている事と思います。

今回の研修では要望の多かったソーシャルワーク実践について、前会長の杉山明伸氏を講師にお招きして『省察＝リフレクション』のテーマで、日々の私たちの実践を反省的に捉えなおして、ソーシャルワークの価値を改めて見つめ直す機会にしたいと考えています。講義の後には私達自身の事例を元にグループワークを行います。

『省察』に込められた杉山前会長の想いを多くの皆さんと享受し、成長していく機会にしたいと思います。会員の皆さんはもちろんのこと、この機会にぜひ非会員の方もお誘いあわせの上、皆様の参加を研修部一同心よりお待ち申し上げております。



講師・杉山明伸氏

○ 6/6（土）全体研修会、第30回学会のお知らせ

2026年6月6日（土）で準備を進めている通常総代会とあわせて研修部が主催する「全体研修会」と「学会」も開催します。

「全体研修会」については外国人の人権問題について、昨今の排外主義的な差別が蔓延している問題を皆さんと学び考えていきたいと思います。講師について、ノンフィクションライター・ジャーナリストの安田浩一さんに依頼する事ができました。安田さんは「労働問題（特に外国人労働者）」「ヘイトスピーチ」等を中心に取材・執筆活動を行い、社会の闇や構造的な差別に鋭く迫り、警鐘を鳴らす活動で知られています。多くの皆さんに参加して頂けるよう銳意努めて参ります。

「第30回学会」については、先日通知文を送付しておりますが、現在演題募集をしております。改めて、下記ご参照ください。なお、学会の講評者として名寄市立大学の榎原次郎准教授にご対応頂ける事になりました。

日 に ち：令和8年6月6日（土） 午後

会 場：大宮ソニックシティ 市民ホール404会議室

発表資格：埼玉県医療社会事業協会会員

募集方法：発表の主旨を200字程度にまとめ、発表者、所属を明記の上、下記申込み先までE-mailでお送りください。

*抄録の提出ではありません。現時点でお考えになっていることの要点で結構です。

*発表いただく方には抄録作成について後日改めてご案内いたします。

締め切り：令和8年2月28日（土）17:00まで

申込み先：埼玉県医療社会事業協会 研修部 E-Mail training@saitama-msw.org

新年にあたって 北部ブロック責任者・島田拓人

昨年はいつもと比べて良くないことが重なった年でした。家族の悩み、風邪をひいて寝込む、クレジットカードを不正利用される、家のドアがいくつも壊れる、掃除機が壊れる、ライオンズの滑り出しこそ悪くなかったものの終わってみれば5位、などいろいろありました。厄払いをしておくべきだったのか、後になって考えるくらいなら意味がないかと思いつつ、周囲の方々と有休にも助けられ、また新たな年を迎えることができました。きっと今年は反動で良いことがあると信じ、できることから少しずつやっていきたいと思います。ブロック研修は数回開催しますので参加をお待ちしています。研修企画やブロック活動は運営委員が主で行っており、こちらも随時募集中です。興味のある方、昨年はいまひとつだったなという方、お声掛けください。良い年にしましょう。今年もよろしくお願ひいたします。

「MSW Saitama」編集担当からのお知らせ

私たちソーシャルワーカーの活動は社会と共に刻一刻と変化（アップデート）しています。

そこで、今回の「MSW Saitama」も、これまでの「発行日にメッセージや情報を止める」形式を改め、「今」を、その瞬間の熱量とともに届けるスタイルを選んでみました。

一度読んで終わりではなく、開くたびに新しい発見があるような、常に進化するメディアとして、情報の鮮度を大切に、私たちの「今」を誠実に描き直し、書き加えてまいります。



財務部のご紹介と…

財務部長・高瀬紀子

皆さん、いつもスムーズな会費納入にご協力いただきまして、心よりお礼申し上げます。

私たち財務部は理事2名（飯田里美さん）、幹事2名（中平亜希さん、市川葵さん）の4名で楽しくお仕事をしています。

毎年5月末までの年会費（7,000円）納付のご協力を今後とも何卒宜しくお願ひ致します。

振込先：郵便振替（年会費振込先）

口座番号：00160-6-669689

加入者名：公益社団法人 埼玉県医療社会事業協会

今年は会費納入方法をより簡単でスムーズに行える形にできないか検討していきます。詳細決まりましたらご案内させていただきます。

現在は会費の免除制度もありますので、ぜひご活用ください。ご不明な点はお気軽に財務部までお問い合わせください。

さて財務を担当させていただき、今年で7年となりました。皆さんからお預かりしている会費を適切に運営できるように経費の削減や未納会費の回収に努めています。おかげさまで昨年度より黒字転換することができました。これからも会員の皆さん、県民のためとなる協会運営ができるように頑張ります！！

と、堅苦しいお話はこのくらいで私の好きな物の話もするようにとご指示をいただておりますので簡単に。

何はともあれ、仕事終わりの「生ビール」

飲み会に行っても最初から最後まで「生ビール」と体の主成分ビールと思われていますが、最近は少し健康にも気を付けようと仕事終わりに院内のトレーニングセンターに通う日々でございます。長く美味しいビールを飲み続けられるように健康作りに励む所存です！

どうぞ、美味しいビールを飲むときにはお誘いくださいね(笑)

謹んで新春のお慶び申し上げます。 東部ブロック責任者・泉谷圭祐

令和8年は午年。そして話題の「丙午」。60年に1回しか巡ってこない特別な年でもあります。「丙午」と聞くとどこか不穏なイメージを持っている方もいるかもしれません。

ですが、少し肩の力を抜いて説明すると実はなかなか面白い干支なのです。

「情熱」「行動力」「力強さ」「飛躍」といったポジティブな意味を秘め「困難を乗り越えて目標に向かって前進する」「新しい挑戦を始める」といった前向きなメッセージを込めた年なのです。

私も午年ということで、幸運スポットへ行ってみたいという気持ちになり、今年の初詣は神田明神に参拝に行ってまいりました。

そこには、神田明神の神馬『あかりちゃん』という15歳のポニーが飼育されています。神社でポニーという発想はなかなか珍しいですよね。あかりちゃんは厩舎からなかなか出でこない事も多く、果たして無事に会えるかどうか少し不安もありましたが、まずは運試しで行ってみることにしました。

到着してまずはあかりちゃんの居るところを探し覗いてみると、たくさん的人がフェンス越しに一目写真に収めようと並んでいました。1回目、お尻だけしか見えず、神社を一周。2回目、奥の方に隠れてしまい一向に動かず。3回目、何とか動き出したあかりちゃんが陽の光を浴びてこちらに寄って来てくれました。「やったー！」という想いとともに、この貴重な写真を撮ることに成功し、何とかあかりちゃんからパワーをもらうことができたような気持になりました。

会員の皆さんにとって、何事も「ウマく行く」年になりますように。

そのパワーを根源として、東部ブロックでは今年も会員の皆さんのが参加しやすい研修会等を考えて活動していくたいと思っております。

そして、令和8年は埼玉県医療社会事業協会設立70周年であり、そのイベントの実行委員長を担当させていただきます。皆様の期待に応えらえるよう精一杯勤めますので、何卒宜しくお願い致します。



※写真是、神田明神 広報担当の方より掲載の許可をいただいております

手探りの毎日

総務部理事・橋村健司

皆様、本年もよろしくお願ひいたします。

個人的な話になりますが、昨年8月末に息子が生まれました。日々の成長に一喜一憂しながらではありますが、とても貴重な体験をさせてもらっていると感じています。私にとっても衣食住の全てに今まで通りが通用せず、ミルクや入浴、おむつ替え、機嫌取り（？）などマルチタスクさが求められます。私は器用には出来ないので時間をかけて向き合うことで何とかやっておりますが、数か月程度ではまだまだ初心者から抜け出せていないかもしれません。今思えば毎日過ごすだけで必死だったので、大好きなお酒を数か月絶ち（というか、飲むだけの体力が無かった…。）過ごしていました。

最近気づいたのですが、スマホを弄っていると大変興味を示すので（親の顔よりもスマホを目で追う）絵本やおもちゃ等に興味を持つてもらうように楽しさを伝えることも大切だと学びました。絵本の音読も奥深く、感情や抑揚など工夫することで子も親も飽きずに続けられます。今はデジタルよりもアナログにしっかりと向き合う時間を持ってあげたいと思います。このような中で生活の中心が息子の育児になっており、協会の活動にあまり協力できておらず大変申し訳なく感じます。

夜は2-3時間起きに起きて意思表示（ギャン泣き）するので、40歳オーバーの私・妻としては体力的には正直しんどく感じこともあります。何故泣いているのだろう？空腹？おむつ？かまってほしい？…など想像力を働かせますが、全てクリアしても要望は満たせず泣き続けることもあります。生後5か月が過ぎ、少しずつお互いに理解できてきたと思うこともあるのですが、それでも進んで戻っての繰り返しの毎日です。この経験も親子の成長につながるものだと前向きに捉えていきたいです。今回様々な方から声掛けもあって、改めて周りに支えられて生きていると感じることができました。家族、友人、職場の仲間からの言葉はもとより、ソーシャルワーカーの皆さんからの言葉には特別な力があると思いました。ありがとうございました。



総務部からのお知らせ・会員状況

2月3日現在の会員数は、ブロック別にみると、東部 61名、西部 132名、南部 104名、北部 88名、合計 385名（不明会員1名を除く）になります。

Distilled 03/1988-Bottled mm/yyyy 3rdFill

西部ブロック責任者・大野将人



2014年7月1日、あの日、現職である社会福祉協議会の勤務初日、日付を回ったころもまだ、だれもいなくなつた医療相談室で社会人として初めて与えられたデスクの拭き掃除をしていた。最終日もいつもどおり、外来から業務用携帯に内線が飛んできて患者さんとそのご家族を他院へ送り出した。バタバタしたいつもの1日だった。10年以上も前のことでの記憶には残っていないがきっと、夏を迎える季節らしい、暑い一日だったと思う。あの頃はまだ、そんな暑い日でもきちんとネクタイを締めていたのをふと思い出した。

中学高校と部活に勤しみ、長期休暇があると期待して入った大学生活は実習実習また実習で、思い描いていた大学生活とはだいぶ違った。社会人となり、世の中にはユウキュウショウカなる言葉があることはもちろん知っていたけれども、自分には縁遠い言葉だったようだ。「やれやれ」と心の中で呟きながら、夕礼で渡された色紙を眺める。折り紙の台紙に、1人1人からメッセージが書かれたそれは、色とりどりに装飾され、丸みを帯びたやさしい書体で書かれた表題が心にしみてくる。デスクの片付けが済むまでに、何度も見返してしまった。気づけばもう、時計の針は午前1時を指していた。

…という、転職初日なのにその日はまだ前の職場にいたという嘘のような実話です。突然ですが、実はこの度、2度目の転職で12年弱勤めた社会福祉協議会を退職することとなりました。本来でしたら、お世話になった皆さんには直接お一人お一人に報告させていただくべきとは承知しておりますが、こうした機会をいただきましたので書かせていただくことに致しました。

医療現場から地元で地域福祉の現場に飛び込み、最初に与えられた仕事は新規事業として始まった法人後見の受任に向けた準備でした。1件目の後見受任は、入職から半年後、日常生活自立支援事業からの移行案件でした。8050問題ならぬ9060問題で、ご家族対応は被後見人が亡くなり、後見が終了した後もしばらく続きました。その後は、市民や受任者向けの相談所開設や各種権利擁護に関わる講座の企画運営、成年後見制度利用促進のための中核機関設置など10年かけて権利擁護の仕事にがっぷり四つで取り組ませていただきました。

この1年余りは、生活支援コーディネーターとコミュニティソーシャルワーカー、ボランティア担当として地域福祉ど真ん中の業務を経験させていただいている。振り返ってみれば、在籍期間も相まって権利擁護部門での経験が社協人生の土台になっていると強く感じます。当協会の大先輩をはじめ、色々な方々に教えていただき、支えられてここまで来れたなと思えば思うほど感謝しかありません。この場を借りて、これまでのご指導に御礼申し上げます。

さて、話は変わりますが冒頭のエピソードの1年前、私が運命的な出会いをしたものがあります。そうです。大好きなウイスキーです。2013年11月29日、六本木ヒルズで開催された音楽イベント「BLESS」でのことでした。とあるバンドが無料で見られると、大学の友人とともに足を運んだのですが、実は某大手飲料メーカーが主催するウイスキーの周知イベントだったのです。そこで提供されたハイボールは、私が持っていたウイスキーのイメージを見事にぶち壊してくれました。それから、コロナ禍を経ても私のイエノミームは衰えを知らず、今ではストックしているウイスキーがジャパニーズとスコッチを中心に80本近くになってしまいました。

皆さんは、ウイスキーがどのように造られているかご存じでしょうか？実は、途中までビールと同じ工程でつくられた原料を、蒸留することでウイスキーの元となるニューポットと言われるスピリットが作られます（ご存じの方からするとかなり乱暴な説明ですがご容赦ください）。その後、ニューポットを様々な種類の樽に入れて寝

かせるのですが、時には樽や保管場所を変えながら熟成させることで様々な性格の原酒が出来上がります。この歴史は古く、紀元前 2000 年ごろにメソポタミア地域でバビロニアの人々が蒸留技術を生み出したことを源流としていると言われています。初めは薬として使用されていた原酒は、重税や禁酒法といった社会の荒波にもまれ、ウイスキーを愛する人たちに抱かれながら偶然の中で樽熟成という方法が生まれ現在に至ります。最も長く熟成され世に出たものは、昨年発売された 85 年物のスコッチがそれにあたりますが、長く熟成させればよいというわけではなく、それぞれの原酒のポテンシャルをブレンダーと言われる管理者が見極め、最高の状態で樽から瓶に詰められます。

味もさることながら、これらの歴史や熟成の背景、様々な性格に単なる嗜好品といったくくりを超えた強い魅力を感じ今日の今日までどっぷりハマってしまっています。生まれや育った環境、経歴や強みに弱み、、、なんだか人間みたいに感じませんか。市場に出回っているウイスキーの多くはブレンドされたものなのですが、ブレンドすることでそれぞれの強みが活かされ、弱みを補い合い、おいしい一本が出来上がります。

私というニューポットは蒸留から 38 年を迎え、教育期間を経て専門職となり、病院で 4 年、社協で 11 年それぞれの樽で過ごしてきました。熟成のピークを決めるブレンダーはもちろん私自身ですが、その時、私は魅力的な原酒になっているでしょうか。次の樽はどんな樽かなと、不安ですが楽しみもあります。幸いにして、熟成させる樽や環境は自分で選ぶことができます。できれば最期まで熟成できる、そんな環境に身を置いてソーシャルワーカー人生を全うしたいと考える今日この頃です。